質的研究において精神分析技法はどう役立ちうるか
―センシティブな話題を扱う面接での逆転移の利用―

藤居　尚子

１．心理臨床面接と調査面接に接点が見出されつつある現在

心理臨床家が援助目的で行う面接(以下，心理臨床面接と表記)と，研究者が調査の目的で行う面接(以下，調査面接と表記)とは似て非なるものと捉えられやすい。しかしこの様相には近年変化が見られる。それは質的研究の目覚ましい台頭による。

現在，質的研究は心理学をはじめ幅広い学問領域で用いられている。Denzin & Lincoln (2000/2006) の説明によれば，質的研究とは「世界を可視化する解釈的で自然構成的な一連の実践からなる」ものであり，「質的研究者は事物を自然の状態で研究し，人々が事物に付与する意味の観点から現象を理解ないし解釈しようとする」。

このような質的研究は，それまで主流だった定量的研究の限界を補うものと位置づけられるだけでなく，心理臨床家が現場で培った感性を生かしやすい研究手法とも言えるであろう。というのも，遠藤 (2006) が旧来の心理学に対し「人のふるまいを，解体し，また脱文脈化し，さらにその人自身の内なる声を削り取ろうとするアプローチからは，当然のことながら，人の生のリアリティというものが少なからず剥落していく」と指摘する一方，質的研究はひとの経験世界をありのまま把握することを目指したアプローチであり，これは援助のためにひとを理解しようとする心理臨床家の視点と共通しているからである。

このようにして質的研究の台頭を契機に，臨床実践と研究の接点が増えつつある。ならば，臨床家が実践で用いている概念や技法を質的研究に適用することは有意義な結果をもたらすだろうか？これが本稿の問いである。

ここで上記のような接点の具体的現れとして，調査面接のあり方が挙げられる。質的研究においては「諸個人の生活における日常的ないしは問題的な場面や意味を示す多様な経験的資料」(Denzin & Lincoln, 2000/2006) を得る手段として調査面接，とくに語り手の自由な語りを促す非構造・半構造化面接がしばしば用いられる。

これまで質的研究法においても客観性は依然として重視されてきた。例えば調査面接のなかでインタビュアーに期待されることは，インタビュイーに何ら影響を及ぼさないことであった。しかし近年ここに興味深い動向が見られる。やまだ (2006a) は，最近の質的研究におけるインタビュー法の捉えられ方に関する大きな変化を４点あげた。要約すると以下である。①インタビューは，人間が同じ人間として対等と位置づけられる相手から対話的に話を聞く方法である。②インタビュアーはニュートラルな存在ではありえず，インタビュー場面においてアクティヴ

な相互行為を行う参与者と位置づけられる。③インタビュイーの語りは内側に存在する既存のモノではなく，インタビュー状況のなかでインタビュアーとの共同生成的なやりとりによって生み出された生きものとして扱われる。④インタビュー行為は，それ自体がナラティヴ研究の対象であるとともに，常に省察的に研究されるべき対象となる。

このように質的研究における調査面接が相互作用過程であることが強調されるようになったのは，いわゆるナラティヴ・ターン narrative-turn の一環である（詳しくはやまだ，2006b)。そこでは，インタビュイーは「情報の収納庫」ではなくインタビュアーと協同で知識を構築していく(Holstein & Gublium, 1995/2004) と理解され，「観察者は，場所から独立して「透明人間」のように存在することはできず，多かれ少なかれ場所のなかで相手と関与しながら観察する存在として組み替えられる。たとえ傍観的に観察し，相手とまったく相互交渉をもたないとしても，「観察する」行為自体が，その場所に関与することになる」 (やまだ，2006b) 。

一方，面接を心理臨床実践で日常的に用いる臨床家の間では，精神分析家で精神科医の Sullivan (1953/1976) による「関与しながらの観察」の概念は広く知られている。Sullivan は，「観察者が観察される者とかかわりあってつくる場において観察者と観察される者との間に起こる現象」のみが研究可能であり (Sullivan, 1953/1976)，「精神科医が一隅に身を隠しながら自分の感覚器を利用して他の人間の行為を認知することはできない。…(略)…目下進行中の対人作戦に巻き込まれないわけには行かないのである」(Sullivan, 1954/1986) と述べた。観察者がその場に影響を及ぼさずに他者を観察することは不可能と断じるこのような見方は，まさに先ほどのやまだ (2006b) の指摘と一致する。心理臨床面接と調査面接は目的を異にしながらも，そこでは共通の原理が強調されるようになりつつあるのである。

Sullivan の考えは「一個の人格を，その人がその中で生きそこに存在の根をもっているところの対人関係複合体から切り離すことは，絶対にできない」(1953/1976) とする点で，心を個人内に閉じた存在と考える Freud と大きく異なる。この Sullivan の理論は対人関係論・学派として米国を中心に発展し，面接での両者の相互影響性を強調する関係論や間主観性理論といった精神分析の「リレーショナル・ターン relational turn」(Mills, 2005) をもたらすに至っている。

Sullivan (1954/1986) は面接を「二人グループにおける主として音声的な対人の場」での「専門家=依頼者関係」と定義し，この場の目的は「被面接者すなわち患者あるいは来談者の生のその人特有のパターンを明確にしようとすること」であり，自身の面接論の適用範囲は精神医学に限らないと考えていたが，実際にこのように調査面接と心理臨床面接が歩み寄りを見せていることは，彼の洞察の鋭さを証明するかのようでもある。

このような理論上の歩み寄りを実用に生かすためには，具体的な技法に関する議論が必要である。調査面接の技法について例えばやまだ (2006a) は，相互行為としてのインタビューにおける質問技法の重要性を論じ，面接での質問の仕方と語りの生成の関係について過程を追い子細に分析した。また Holstein & Gubrium (1995/2004) でも，インタビュアーが関わりを工夫することで「主体が当該状況に関連した意味を持ってくるように促し，解釈の可能性を広げ，物語と物語が結びつくことを容易にし，現在のものと代替するさまざまな視点を示唆し，多様な意味の地平を肯定的に評価する」過程を示した。

他方，心理臨床面接で特徴的に発展している面接技法は，いわゆる「受容」と「共感」の強

調からわかるように，語りの感情的側面を取り扱うことに関してである。それは心理臨床面接の目的が，こころの問題を抱えたひとの援助であることによる。

語りに伴う感情の側面は，質的研究においてデータの客観性を阻害する要素として捉えられてきたが，最近，感情は意味や経験に絶え間なく影響を及ぼし続けているものであるとの認識が強まりつつある (Cromby, 2012)。したがって質的研究において感情的側面を取り扱う具体的技法はとくに必要とされているものの一つだろう。

このように考えてくると，心理臨床面接の技法がいかに調査面接に生かしうるかを考えるうえでは「観察」と「感情」がキーワードになりそうである。そこでこの２つのキーワードを巡って論を進めるうえで，センシティブな話題に関する研究 sensitive topics/issues, sensitive research に焦点をあてる。センシティブな話題とは，詳細は後述するが，例えば死別体験に関する研究など調査の際に通常より慎重な配慮を要するものが該当する。このような話題に関する調査面接は，インタビュイー側に感情的動揺などの負担がかかる可能性を配慮して，インタビュイーの状況を丁寧に観察し適切に対応することが要請される。また後で概観するように，この種の類の調査ではインタビュアーにも強い感情が喚起されるという特徴をもつ。

ところで Sullivan (1954/1986) は「精神科医の主要観察用具はその『自己』である」とした。そこで以下に論を進めるうえでは，インタビュアーがいかに自己を使って「観察」し「感情」を取り扱っていくことが有用なのかを考えるという意図で，Sullivan および対人関係論的精神分析の見方を参照する。他の精神分析諸派と比較した対人関係論の特色は，面接において分析家という存在が被分析者に及ぼす影響に注目することにある。

2. センシティブな話題に関する研究をめぐる諸知見

「センシティブな話題」に関する研究については，我が国では筆者の知る限り特段の議論がされていないが，海外では 1990 年より関連の研究数が大きく増え (van Meter, 2000)，2000 年から 2010 年には 116 本の論文が発表されている (Lee & Lee, 2012)。

(１)センシティブな話題に関する研究とは

センシティブな話題という概念は自明で日常用語のように用いられがちで特段の定義がされないことも多いが (Lee, 1993)，ここでは Lee (1993) の「その研究に携わる者 those who are or have been に相当の脅威を及ぼす可能性のある研究」を採用する。なぜならこの定義は調査に携わる関係者への影響をも射程に入れるもので，本稿の議論の方向性と合致するからである。

Lee (1993) は, 脅威的となる具体的な研究領域として①私的な領域や, ストレスフルな領域, あるいは神聖な領域に侵入するようなもの，②逸脱や社会的統制に関するもので，スティグマとされていることや犯罪を明らかにする恐れのあるもの，③政治的なつながりと衝突しうるような話題を挙げている。Lee & Lee (2012) によれば，2000 年から 2010 年に扱われた話題には，AIDS，障がい，少数民族，LGBT，性暴力や DV，中絶などがあった。

(２)センシティブな話題を取り扱う調査面接で生じやすい問題

センシティブな話題を取り扱う研究では，調査への協力依頼から成果の公開まで研究過程の全てにわたりさまざまな配慮を要するが (詳しくは Liamputtong, 2007)，本節では調査面接の場面に直接関連する点のみ提示する。

インタビュイーへの影響　センシティブな話題についての調査を実施する際にまず考慮すべきはインタビュイーの負担である。先に Lee (1993) が挙げたうち，心理学領域で問題になりやすいのは侵襲性の高さであろう。Hadjistavropoulos & Smythe (2001) は，調査面接でインタビュイーが苦しい記憶を再び想起したり，非構造化面接では質問が事前に明確には定められていないために語りのなかで未解決の葛藤に触れてしまったりと，インタビュイーのネガティブな感情を強めてしまう結果になる場合もありうることを指摘している。

一方 Corbin & Morse (2003) は，非構造化面接ではインタビュイー自身が何をどこまで話すかや面接を続けるかを決められることを指摘し，センシティブな話題について語ることにリスクが皆無というわけではないが，同時にインタビュイーには利益もあり，大事なのは後者により前者が緩和されることだと述べる。実際に Dyregrov (2004) は，自殺や SIDS (乳幼児突然死症候群)，事故で子を亡くした親を対象とした面接調査の後，参加者が面接をどう感じたか尋ねた。その結果，参加者の 73%が面接は苦しかったと評価したが，同時に 96%の者が良い経験だったとも評価した。ただしインタビュアーの立場から「語ることがどの協力者には有益でどの協力者には負担となるか，確証をもって事前に判断することはできない」との指摘もある (Johnson & Clarke, 2003) 。

インタビュイーへの負の影響を減らすためには，面接中の彼らの状態を敏感に把握することが必要である (Grafanaki, 1996; Corbin & Morse, 2003)。また先述の Dyregrov (2004) では，参加者は消耗しつつもインタビュアーの共感的な対応によって面接を継続できたと報告した。

インタビュアーへの影響　Lee & Lee (2012) は，近年の研究動向の特徴としてインタビュアーの感情面の問題に関する研究が現れるようになったことを指摘する。研究例としては Dickson-Swift et al. (2006; 2007) や Johnson & Clarke (2003) による，センシティブな話題に関する調査面接のインタビュアー経験者への聞き取り調査が挙げられる。

それによるとインタビュアーは，インタビュイーの過去の傷を開いたり，隠している情報を掘り出したりしてしまうのではと懸念する (Dickson-Swift et al., 2006) といったことの他にも，さまざまな感情を抱くことが Dickson-Swift et al. (2007) で報告された。例えばインタビュイーの語りに耳を傾けるうちに愛着が生まれ，調査終了後もインタビュイーのことを考え続ける，また秘められていた内容を語られることへの責任の重さや特権意識，興奮と同時に相手を研究のために利用しているのではという罪悪感がわいたり，あるいは大変な話を聴き続けた結果の無感覚や，安定が揺さぶられた者もいた。そのように様々な感情が複雑に交錯するためか，心身の疲労困憊感も訴えられていた。Dickson-Swift et al. (2006) では，多くの者は専門家としての態度を保ち感情的に巻き込まれまいと努めていた。また Johnson & Clarke (2003) では，インタビュイーの費やしてくれた時間やエネルギーに返報できないこと，自分もインタビュイーのように致命的な病気に罹患するのではと不安に駆られるなどの心的負担が大きいにもかかわらずサポートが得られにくいことに対し孤独感を訴える者もいた。

境界の取り扱い　これについても Dickson-Swift et al. (2006) や Johnson & Clarke (2003)の報告がある。本来，インタビュアーとインタビュイーは，調査協力という契約に基づく公の関係であり他の関係とは明確に区分されている。しかし Dickson-Swift et al. (2006) では，センシティブな話題について語ってもらうためインタビュアーは強いラポールを築こうとし，その結果

として公私の境界がしばしば揺らぎがちであった。例えばそれは，調査の後もインタビュイー宅にとどまったり，家族行事に招待したりといった形で現れ，その結果友達付き合いのような関係が発展する。その結果，調査が終了しても交流を終えにくいケースも多く見られた。それは語りを共有した自然な帰結と捉えられる一方で，インタビュイーと関係を永続的に続けることの不可能性に直面する者もいた。

さらに Dickson-swift et al. (2007) では，インタビュアーが自身の過去経験を自己開示する傾向も報告され，それにはインタビュイーとのラポールや対等な関係の形成といった意味の他，苦痛な体験を語るインタビュイーへの返報の意図もあった。

また調査面接と治療的面接の境界も不明確になりやすかった。個人的な話に耳を傾けられる機会はインタビュイーに治療的と受け取られやすく，それに対し援助職の訓練を受けていないインタビュアーは負担や混乱を感じ (Dickson-Swift et al, 2006), 援助専門職者は援助的介入が行えないことに役割葛藤を抱いていた (Johnson & Clarke, 2003)。

３．調査面接における精神分析技法の活用—逆転移の概念

前節では，センシティブな話題がインタビュイー，インタビュアー，そして両者の境界に及ぼす影響について見た。そこからはセンシティブな話題を扱う面接の特徴として両者の感情が大きく揺さぶられながら交錯し続けるさまが推測され，センシティブな話題をめぐる語りは，二者の相互行為としてのナラティヴの性格をことさら強く持つと考えられる。

ここでインタビュアーが感情的に巻き込まれまいとインタビュイーから距離をとった態度を堅持するなら，それはナラティヴの促進のうえで大きな障害となるだろう。むしろセンシティブな話題を扱うインタビュアーに必要なのは，インタビュイーと「適度に関わり続ける」姿勢である。そのためには面接場面で自身の揺れ動く感情をいかに扱うかが課題となる。また，データ分析において感情という要素を切り離すことなく活用ための手法も求められる。

センシティブな話題の研究における感情の取り扱いに関し Lee & Lee (2012) は，過去のフィールドワークでの先例に触れ精神分析の重要な概念である「転移」「逆転移」に言及しているが，このように近年，精神分析的アプローチを質的研究に取り入れることへの関心が見られる (例えば Hollway & Jefferson, 2000；Frosh & Young, 2008)。

(１) 逆転移の定義

精神分析諸学派において定義は異なる部分はあるが，一般的に言えば，被分析者は親など過去の重要な他者との間で形成された関係の在り方を分析家との間にも持ち込むとされ，そこで分析家に向けて抱かれる感情や態度などを転移 transference，それに対し，分析家が被分析者に向ける感情や態度などを逆転移 countertransference と呼ぶ。

分析家側の逆転移感情に関し，Freud (1910/1983) はそれを (被分析者の転移と同様に) 分析家の個人的歴史に由来するものであって，被分析者の語りを歪めて受け取ることにつながるとして問題視した。しかし精神分析理論の発展につれ，逆転移には被分析者が言葉では表せない無意識的内容を転移として分析家に向けコミュニケートしたものが感知された要素も含まれており，その意味で逆転移は被分析者の理解を深めるための有力な道具であると考えられるようになった (Heimann, 1950/2003 ; Hinshelwood, 2016)。対人関係学派でもそのような逆転移の有用

性に関する認識は同様である。加えて分析家の側が被分析者に及ぼす影響をも重視し，両者の間では転移・逆転移による双方向の交流が常に生じ続けていると考える (Hirsh, 1995)。

逆転移は分析家の感情としてだけでなく，身体感覚や夢，ファンタジー，あるいは意図せず思わずとった行動など様々な形で現れるので，分析家には逆転移の現れに敏感に気づきその内容を吟味することが求められる。

転移・逆転移の概念の適用範囲には論者により幅があるが，前述したように自らの理論を精神医学的面接の枠外にも適用しうるとする Sullivan [注1)]の影響を受ける Fromm-Reichmann (1950/1964) は，転移を「もっとも普遍的には，幼児期の対人的かかわりあいの型を現在の相手に移し変えくり返す」ものと定義し，これはあらゆる人間に生じるもので，「精神科医を含めただれにでも，援助してくれそうなひとに相談しようと考えただけで」発展しやすくなると説明する。すなわちこれに従えば援助関係一般において転移・逆転移による交流が生じうる。しかしさらにその範囲を調査面接にまで拡大可能かについては，精神分析的面接と調査面接のもつ性質の異同をまず検討する必要がある。

(２)「逆転移」概念の調査面接への適用可能性をめぐって

Parker (2010) は精神分析と調査面接の差異を詳細に論じ，それに基づいて転移・逆転移は臨床的に設定された精神分析の枠組みのなかでしか起こり得ないと断じた。彼の言う両者の差異とは例えば，精神分析では自ら話すことを求める被分析者が料金を払い面接を受けるが，調査面接ではインタビュイーはインタビュアーの求めで(ときに謝金を受け取り)語りに来ることである。また精神分析で扱う幼少期の記憶や夢，性的ファンタジーなどの話題や，やりとりのルールは日常会話のそれとは異なること，さらに精神分析では解釈を被分析者に伝えることやそれをめぐる被分析者の反応を扱うことである。

これに関し Holmes (2013a) は，調査面接では精神分析のような自由連想にはならないこと，インフォームド・コンセントの観点や１回限りの面接であることから調査面接では精神分析的面接のような解釈を行うことは問題だとして両者の差異を認める一方，調査面接に参加する者には自分の体験を語り自己理解を深めたいという動機もあると論じ，その点では精神分析と共通しているとする。これは先述したようにセンシティブな話題に関するインタビュイーが面接に治療的意義を感じる傾向とも重なる。センシティブな面接が実質的には援助的意味をもつならば，前述の Fromm-Reichmann (1950/1964) の言を根拠にすれば，そこでの二者の交流に転移・逆転移に類似した要素が含まれると位置づけることはできるだろう。

しかし質的研究者が「逆転移」というとき，それは概してインタビュイーの感情が無意識的にインタビュアーに伝達されたものという限定された意味に用いられている (Holmes, 2014) 。また精神分析において転移・逆転移関係を考えるとき，そこで分析家が感知したものは被分析者の対人世界一般に関するものであると通常理解される。一方，質的研究者はインタビュアーが感知したものを調査テーマとして設定された特定の事柄(例えば死別，難病への罹患など)にまつわるものとして解釈しようとする点でも精神分析の考え方とは異なっている。

例えば Holmes (2013b) は移民経験についての調査面接で，その最中やデータ分析の際にインタビュアーとしての自身の内に生じた感情を吟味し，インタビュイーの心の動きを検討する過程を詳細に記述している。そしてこの過程を経て，異国への移住という困難な経験をめぐり機

能している各インタビュイーの防衛機制を見出せたと結論する。しかし精神分析的な逆転移理解の枠組みからは，ここで見出された防衛スタイルが果たして移民経験について特異的に現れたものなのか，あるいはインタビュイーが過去の人間関係のなかで築き上げ，日常の対人関係一般において用いている機制を同定したにすぎないのかを判断する根拠は見当たらない。

したがって質的研究者の言う「逆転移」の捉え方は精神分析のそれとは同一ではなく，両者の混同は避けるべきであるが，このことは質的研究においてインタビュアーの感情を活用しようとすることの意義を否定するものではない。実際にこれまでにセンシティブな話題をめぐる調査面接に関して，インタビュアーの感情に注目した研究例があり，それらは対象者の理解や調査面接の特質に関し有意義な知見を導き出している。

例えば Marks & Mönnich-Marks (2003) は，第二次世界大戦中に一般市民がヒトラーやナチスに賛同し積極的に協力した背景を探る調査面接を行った。インタビュイーが語った内容は平板であったにもかかわらず，インタビュアーは語りの「行間」から，圧倒された感じ，空虚感，悲しみ，混乱，気分の悪さ，虐げられノックダウンされた感じなどといった反応や悪夢を見た。面接時の雰囲気や語られ方などと合わせて検討したところ，インタビュアーの内面には操作されたり使われている感じ，自分が世間知らずで，弱く臆病で劣った人間のように感じるなどの思いが引き起こされていることが明確になり，それらはインタビュイーが無意識的に投影した「恥」の感覚であると解釈された。そのような解釈から生成された仮説に照らしインタビュー内容の分析が進められた結果，戦時中のドイツ国民が政治状況のなかで感じていた恥の感覚への防衛としてヒトラーやナチスへの賛同が生じた可能性が示唆された。この研究では，面接終了後に複数のインタビュアーで面接内容を録音したものを聴き，そこで生じた感情を話し合うなどの緻密な手続きの導入と，そこで得られた解釈をあくまでも言語データ分析上の仮説生成に用いるにとどめる点で，データの妥当な活用の工夫が見受けられる。

また Gemignani (2011) では，難民を対象とした調査面接の際に，インタビュイーがインタビュアーの心情を気遣った場面で，そのときにインタビュアーの中にわいた感情とその結果とった態度について省察し，両者それぞれに「優秀なインタビュアー」「優秀なサバイバーとしてのインタビュイー」として見られたい願望があった可能性が気づかれ，そしてそのように自己を称賛することが，インタビュイーが難民として移住した後の困難を乗り越え，また外傷的な体験に意味を与える方略であったことが見出された。その他のエピソードもふまえ Gemignani は，このような調査面接ではインタビュアーが自分自身を調査面接の場に持ち込まざるを得ず，インタビュイーと切り離された存在にはなり得ないことを論じた。

さらに Boden et al. (2016) は自殺遺族や自殺未遂経験者を対象に面接調査を行った。その際インタビュアーに空虚感が生じた面接と，対照的に困難な感情でいっぱいになってしまった面接とについてインタビュアー自身の感情を省察した結果，じゅうぶん言葉にはされなかったインタビュイーの苦しみや悲哀，混乱が見出せたとする (なお Boden et al. は二者の交流を表すうえで「逆転移」ではなく「間主観性 intersubjectivity」の語を用いているが，これは二者交流の相互性，不可分性を強調する意図と見受けられる)。Boden et al.は一連の調査面接からインタビュアーに抱かれる感情を細分化して把握する枠組みを構成し，そのような枠組みがインタビュイーや面接場面で生じていることを理解するうえで役立つことを示した。

これらはインタビュアーがインタビュイーの体験にできるだけ迫ろうとする有意義な試みである。このような試みにおいてインタビュアーは，精神分析家による逆転移の気づきと取り扱い方から有益な示唆を得ることができるのではないか。

(３)省察において逆転移の概念を援用すること

先ほどの研究例でも見たように，面接の実施中やデータ分析の段階でインタビュアーの感情を吟味することは，質的研究で重視される「省察 reflexivity」の一環となるが，ここで精神分析の逆転移概念を参考にすることは具体的にどのような意義をもたらすだろうか。

より丁寧な省察へ　精神分析において逆転移を吟味する意義の一つは，Freud と同じく，被分析者の語りを傾聴するのを困難にする分析家自身の個人的背景に由来する感情的反応を統制することである。これにより，被分析者由来の要素だけが正確に受信しやすくなると考えられる。調査面接においてもこの点の吟味はPatton (1990) が言う「共感的中立性 empathic neutrality」，すなわち共感的にインタビュイーに関わりつつも，価値判断抜きに語りを受け取る姿勢の維持に貢献すると考えられる。

しかし，分析家も調査者も，そのような中立性を実現することは現実的には不可能でもある。対人関係論的精神分析においては，分析家が面接の場に個人としての価値観やパーソナリティなどに基づいて反応することは避けられず，完全な中立的態度は実現し得ないと考え，むしろその自覚が大事とする (Hirsch, 1995)。これは調査面接に関する前述の Gemignani (2011) の論と重なる点であり，また同じく Berger (2015) も，インタビュアーの個人的要因が調査面接の様々な局面で及ぼす影響を実感した自身の経験を論じている。

境界の適切な保持 Berger (2015) は，調査者が及ぼす影響の省察は倫理的にも重要だとする。Dickson-Swift et al. (2006) は，前述のようなセンシティブな調査面接における境界の揺らぎへの対処としてカウンセラーの場合と同様に自身の状況をモニターすることを勧める。

境界を明確にすることは，Dickson-Swift et al. (2006) が主張するインタビュアーのバーンアウト防止だけでなく，インタビュイーに安心感を与えるうえで重要である。センシティブな話題は侵襲性が高く，インタビュイーの心的外傷に触れることも少なくない。しっかりとした境界を保つことは，守られた場をインタビュイーに提供することにつながる。前節の概観からは，境界の問題はラポール構築と表裏一体で生じるようであるから，どのような働きかけが個々のインタビュイーにどのような影響を及ぼすのかを慎重に吟味しなければならない。

精神分析の立場から Gabbard & Lester (1995/2011) は，境界を越える行動は分析家の逆転移が行動に移されたもの (逆転移エナクトメント) であるとしたうえで，その行動が無害あるいは有用でありうる「境界横断」と深刻で有害な「境界侵犯」のどちらであるかは一概には判断できず，それは分析家と被分析者の両者の相互交流のなかで決まると論じる。センシティブな話題に関する面接においても，調査者としての定められた役割や行動基準から逸脱しそうなとき，それが自身のどういう感情によるのかを吟味するという精神分析的な姿勢が有益であろう。

分析家の自己開示についても対人関係論的見地から Moses & McGarty (1995) は，その是非は面接場面の両者の関係性に応じて判断するべきで，またそのような自己開示を相手がどう体験するかの観察が必要であることを強調する。前節ではセンシティブな話題に関する調査面接においてインタビュアーが自身の体験を語る行為がラポール構築や返報性の理念のもとに行われ

ていることを見た。このような自己開示があるインタビュイーには“自分たちの体験世界に積極的に共通点を見つけ歩み寄ってきてくれた”と肯定的に受け取られるとしても，別のインタビュイーにとってはそのような接近が脅威に感じられる場合もあろう。ここでインタビュアーは，自分の体験を共有したいという欲求が何に由来するのかを適切に吟味する必要がある。

４．逆転移の概念を援用するうえでの留意点

精神分析における逆転移の概念やその取り扱い方は，調査面接においても参考にしうることをここまで見てきた。ただしその際に考慮すべきいくつかの留意点がある。

第１に，得られた情報の妥当性に関してである。精神分析家 Hinshelwood (2016) は「逆転移には，大いに有用となる潜在的可能性があるように見えるが，同時にそれは，簡単に間違いへと導く，頼りにならない道具でもありうる」と述べ，逆転移のみを根拠に被分析者を理解することを戒める。調査面接では精神分析的面接と異なり解釈を伝えてインタビュイーの反応を見ることができず，また生育歴などの背景情報が少ないので(Frosh & Young , 2008) ，妥当性判断はさらに困難である。前述した Marks & Mönnich-Marks (2003) のように，インタビュアーに生じた感情を根拠とする情報は仮説生成や省察の一助にするといった補足的な位置づけとしたり，他の方法で得られたデータと比較する (Holmes, 2014) などの工夫が必要であろう。

さらに先述したとおり，インタビュアーが抱く感情を該当の調査テーマに関連するものと一義的に捉えてよいかは検討の余地がある。

第２に，逆転移の概念から考えると，インタビュアーが感知した内容はインタビュイーにとって無意識水準のものである。精神分析的面接であれば逆転移感情に基づく理解は分析者から解釈の形で被分析者に伝えられ，それを被分析者の自己理解の深化につなげていくが，それには精神分析家の専門的訓練と，一定期間をかけ作られてきた両者の信頼関係を基盤にした十分な配慮が前提にある。調査面接においてインタビュイーが意識していない自己の側面についてインタビュアーがむやみに言及することは傷つきにつながる場合もあろう。研究結果のフィードバックにおいても同様に，何をどのように伝えるかについて慎重な検討が必要である。

第３は，インタビュアーの訓練・サポート体制の必要性である。Bromberg (1984) が言うように，分析家が被分析者との相互作用過程のただ中にいるときには，視野が狭くなりそこで生じていることに気づきにくくなる。そのため，インタビュアーが自身の感情的反応を扱うには一定の訓練が必要であろう。ここでも精神分析家の場合と同じく，スーパーヴァイザーという「第三の耳」(Bromberg,1984) の助力を得て状況に気づけるようにすることは有用である。ただしこのようなスーパーヴィジョンには高い専門性を要するため，精神分析的な専門性をもつスーパーヴァイザーの確保が求められる。

また前述したように精神分析では，分析家に生じる逆転移感情には被分析者からのメッセージを感知したことによるものと，分析家の個人的歴史に起因するものとが混在していると考えている。そこで逆転移を被分析者の理解に活用するうえで分析家がとる別の方法には，自身が精神分析を受ける (個人分析あるいは教育分析と呼ばれる) ことがある。自己理解を深めることで，逆転移のうち個人的要因に起因する部分を分析家が認識できるようになる。これと同様に，インタビュアーについてもこのような分析を受けることが勧められる。

またセンシティブな話題に関する調査面接においては先述のとおりインタビュアーに強い心理的負荷がかかる。スーパーヴィジョンや個人分析は，そのようなインタビュアーの心理的サポートにも役立つものでもある。

５．結論

本稿では「観察」と「感情」をキーワードに，「関与しながらの観察」の祖である Sullivan の系譜を引く対人関係論的精神分析の観点に依拠しながら，センシティブな話題に関する調査面接において精神分析で用いられる逆転移の概念やそれを取り扱う技法の活用可能性を，先行文献に依拠しながら解説した。そこからはインタビュアーの内に生じる強い感情的反応を精神分析における逆転移の概念を参考に取り扱うことが有用にはたらく可能性がうかがえた。しかし同時に，調査面接と心理臨床面接の安易な混同は理論上・実践上の混乱や種々の問題を招きかねず慎重さが求められる。

筆者は精神分析的な心理臨床家として逆転移の概念の意義を実感している立場から本稿を執筆した。質的研究の専門家，あるいはその双方の経験をもつ読者によって，今後我が国でもこのテーマに関する議論が活性化することを期待したい。

注１) Sullivan 自身は，転移・逆転移という用語は用いず，転移に類似した概念を「パラタクシス的歪曲」parataxic distortion と呼んでいる (Sullivan, 1954/1986)。

引用文献

Berger, R. (2015). Now I see it, now I don't: Researcher's position and reflexivity in qualitative research. *Qualitative Research*, **15**, 219-234.

Boden, Z. V. R., Gibson, S., Owen, G. J., & Benson, O. (2016). Feelings and intersubjectivity in qualitative suicide research. *Qualitative Health Research*, **26**, 1078-1090.

Bromberg, P. M. (1984). The third ear. In Caligor, L., Bromberg, P. M., & Meltxer, J. D. (Eds.). *Clinical perspectives on the supervision of psychoanalysis and psychotherapy*. New York: Plenum Press, pp.29-44.

Corbin, J. & Morse, J. M. (2003). The unstructured interactive interview: Issues of reciprocity and risks when dealing with sensitive topics. *Qualitative Inquiry*, **9**, 335-354.

Cromby, J. (2012). Feeling the way: Qualitative clinical research and the affective turn. *Qualitative Research in Psychology*, **9**, 88-98.

Denzin, N. K. & Lincoln, Y. S. (2000). The discipline and practice of qualitative research. In Denzin, N. K. & Lincoln, Y. S. (Eds.). *Handbook of qualitative research*, 2nd edition. Thousand Oaks, Calif. & London : Sage Publications. 平山満義(訳)(2006). 質的研究の学問と実践．平山満義(監訳)． 質的研究ハンドブック――質的研究のパラダイムと眺望．北大路書房，pp.1-28.

Dickson-Swift, V., James, E. L., Kippen, S., & Liamputtong, P. (2006). Blurring boundaries in qualitative health research on sensitive topics. *Qualitative Health Research*, **16**, 853-871.

Dickson-Swift, V., James, E. L., Kippen, S., & Liamputtong, P. (2007). Doing sensitive research: What

challenges do qualitative researchers face? *Qualitative Research*, **7**, 327-353.

Dyregrov, K. (2004). Bereaved parents' experience of research participation. *Social Science and Medicine*, **58**, 391-400.

遠藤利彦　(2006).　質的研究と語りをめぐるいくつかの雑感.　能智正博 (編). ＜語り＞と出会う――質的研究の新たな展開に向けて．ミネルヴァ書房，pp.191-235.

Freud, S. (1910). Die zukünftigen Chancen der psychoanalytischen Therapie.　小此木啓吾（訳）(1983). 精神分析療法の今後の可能性．フロイト著作集 9 技法・症例篇．人文書院，pp. 44-54.

Fromm-Reichmann, F. (1950). *Principles of intensive psychotherapy*. Chicago: The University of Chicago Press. 阪本健二(訳)(1964). 積極的心理療法――その理論と技法．誠信書房.

Frosh, S. & Young, L. S. (2008). Psychoanalytic approaches to qualitative psychology. In Willig, C. & Rogers, W. S. (Eds.). *The SAGE handbook of qualitative research in psychology*. London: Sage Publications, pp.109-126.

Gabbard, G. O. & Lester, E. P. (1995). *Boundaries and boundary violations in psychoanalysis*. New York: Basic Books. 北村婦美・北村隆人(訳) (2011).　精神分析における境界侵犯――臨床家が守るべき一線.　金剛出版.

Gemignani, M. (2011). Between researcher and researched: An introduction to countertransference in qualitative inquiry. *Qualitative Inquiry*, **17**, 701-708.

Grafanaki, S. (1996). How research can change the researcher: The need for sensitivity, flexibility and ethical boundaries in conducting qualitative research in counselling/psychotherapy. *British Journal of Guidance & Counselling,* **24**, 329-338.

Hadjistavropoulos, T. & Smythe, W. E. (2001). Elements of risk in qualitative research. *Ethics and Behavior*, **11**, 163-174.

Heimann, P. (1950). On counter-transference. *International Journal of Psycho-Analysis*, **31**, 81-84. 原田　剛 (訳) (2003). 逆転移について．松木邦裕 (編・監訳) 対象関係論の基礎――クライニアン・クラシックス．新曜社, pp.179-188.

Hinshelwood, R. (2016). Countertransference: An instrument of research. 皆川英明・小波藏かおる・土岐　茂・中甫木くみ子(訳) リサーチの道具としての逆転移．精神分析研究，**60**，278-286.

Hirsch, I. (1995). Therapeutic uses of countertransference. In Lionells, M., Fiscalini, J., Mann, C. H., & Stern, D. (Eds.). *Handbook of interpersonal psychoanalysis*. Hillsdale, NJ: Analytic Press, pp.643-660.

Hollway, W. & Jefferson, T. (2000). *Doing qualitative research differently: Free association, narrative and the interview method*. London & Thousand Oaks, Calif.: Sage publications.

Holmes, J. (2013a). A comparison of clinical psychoanalysis and research interviews. *Human Relations,* **66**, 1183-1199.

Holmes, J. (2013b). Using psychoanalysis in qualitative research: Countertransference-informed researcher reflexivity and defense mechanisms in two interviews about migration. *Qualitative Research in Psychology,* **10**, 160-173.

Holmes, J. (2014). Countertransference in qualitative research: A critical appraisal. *Qualitative Research,*

14, 166-183.

Holstein, J. A. & Gubrium, J. F. (1995). *The active interview.* Thousand Oaks, Calif.: Sage Publications. 山田富秋・兼子　一・倉石一郎・矢原隆行(訳)(2004).　アクティヴ・インタビュー――相互行為としての社会調査．せりか書房.

Johnson, B. & Clarke, J. M. (2003). Collecting sensitive data: The impact on researchers. *Qualitative Health Research*. **13**, 421-434.

Lee, R. M. (1993). *Doing research on sensitive topics*. London: Sage Publications.

Lee, Y. & Lee, R. M. (2012). Methodological research on “sensitive” topics: A decade review. *Bulletin de Méthodologie Sociologique*, **114**, 35-49.

Liamputtong, P. (2007). *Researching the vulnerable: A guide to sensitive research methods.* London: Sage Publications.

Marks, S. & Mönnich-Marks, H. (2003). The analysis of counter-transference reactions is a mea ns to discern latent interview-contents. *Forum: Qualitative Social Research,* **4**, http://www.qual itative-research.net/fqs-texte/2-03/2-03marks-e.htm (2016 年 9 月 1 日取得)

Mills, J. (2005). A critique of relational psychoanalysis. *Psychoanalytic Psychology*, **22**, 155-188.

Moses, I. & McGarty, M. (1995). Anonymity, self-disclosure, and expressive uses of the analyst’s experience. In Lionells, M., Fiscalini, J., Mann, C. H., & Stern, D. (Eds.). *Handbook of interpersonal psychoanalysis*. Hillsdale, NJ: Analytic Press, pp.661-675.

Parker, I. (2010). The place of transference in psychosocial research. *Journal of Theoretical and Philosophical Psychology*, **30**, 17-31.

Patton, M. Q. (1990). *Qualitative evaluation and research methods.* 2nd edition. Newbury Park, Calif.: Sage Publications.

Sullivan, H. S. (1953). *Conceptions of modern psychiatry: The first William Alanson White memorial lectures*. New York: W. W. Norton. 中井久夫・山口　隆(訳) (1976). 現代精神医学の概念．みすず書房.

Sullivan, H. S. (1954). *The psychiatric interview*. New York: W. W. Norton.　中井久夫・秋山　剛・野口昌也・松川周二・宮崎隆吉・山口直彦(訳)(1986).　精神医学的面接．　みすず書房.

van Meter, K. M. (2000). Sensitive topics-sensitive questions: overview of the sociological research literature. *Bulletin de Méthodologie Sociologique*, **68**, 59-78.

やまだようこ　(2006a).　非構造化インタビューにおける問う技法――質問と語り直しプロセスのマイクロアナリシス．　質的心理学研究，**5**，194-216.

やまだようこ　(2006b).　質的心理学とナラティヴ研究の基礎概念――ナラティヴ･ターンと物語的自己．　心理学評論，**49**，436-463.

（臨床実践指導学講座　博士後期課程 1 回生）

（受稿 2016 年 9 月 9 日、改稿 2016 年 12 月 2 日、受理 2016 年 12 月 26 日）

質的研究において精神分析技法はどう役立ちうるか

―センシティブな話題を扱う面接での逆転移の利用―

藤居 尚子

本稿では近年，質的研究における調査面接と心理臨床面接とが Sullivan (1953/1976) の「関与しながらの観察」の点で共通性が増してきたことをまず指摘した。次にセンシティブな話題に関する調査面接の特徴を概説し，それにあたり精神分析での逆転移の概念とその取り扱いを援用することの有用性を述べた。その際 Sullivan から発展した対人関係論的精神分析の観点に依拠した。センシティブな話題に関する調査面接ではインタビュアーも激しく感情的に巻き込まれる。その感情は精神分析での逆転移と同一ではないが，その感情を逆転移の取り扱いを参考に吟味することで①インタビュアーの「共感的な中立性」(Patton, 1990) の維持，②センシティブな話題の面接での適切な境界保持に役立つことを論じた。ただし得られる情報の妥当性やフィードバック，インタビュアーの訓練とサポートの点で留意する必要がある旨を述べた。

How Can Psychoanalytical Techniques Benefit Qualitative Research? : Using Countertransference at Interviews on Sensitive Topics

FUJII Naoko

This paper first highlights the recent emphasis on similarities between qualitative research interviews and psychotherapeutic interviews in that both share the nature of Sullivan's (1953) "participant observation." Second, the author overviews sensitive research and argues how the reference to the psychoanalytical concept and technique of addressing countertransference can be beneficial for sensitive research. The argument is built on Interpersonal psychoanalysis, which evolved from Sullivan's theory. In sensitive research interviews, not only the interviewee but also the interviewer tend to be intensely emotionally engaged with each other. Although feelings held in the interviewer are not the same as countertransference in psychoanalysis itself, implementing analysis of the interviewer's feelings in a similar way as addressing countertransference in psychoanalysis can help the interviewer 1) to maintain an attitude of what Patton (1990) calls "empathic neutrality," and 2) to keep proper boundary between the interviewee and the interviewer in sensitive research interviews. The author also explores some points that need to be addressed when including analysis of the interviewer's feelings in the research design; validity of the data, consideration on feedback, and training and support for the interviewer.

キーワード： 質的研究，センシティブな話題，対人関係論的精神分析，逆転移
Keywords: Qualitative research, Sensitive topic, Interpersonal psychoanalysis, Countertransference